**有家キリシタン史跡公園墓碑群**

17世紀初期、有家は島原半島の経済の中心地のひとつでした。これは、有家の裕福な人々は高価な墓碑をつくらせる財力を有していたことを意味します。

海を見下ろす緩やかな斜面につくられたこの公園には、有家のあちこちから集められた20基の墓碑があります。キリシタン墓碑は全国に192基しかありません。つまり、一度この公園を訪れるだけで、総数の1割以上を目にすることができるのです。有家キリシタン史跡公園は、多くの日本人キリシタンが虐殺された島原の乱（1637-1638）後350年忌を記念して1986年に開園しました。

墓碑の3基には装飾的な彫刻が施されています。それぞれに彫られているのは、花十字（十字の各先端が三位一体を表す三枚の花弁で飾られた十字架）、横棒が2本の形十字、そして花十字と形十字を組み合わせた独特な図案です。

碑銘が刻まれている墓碑は１基のみです。碑の正面ではなく上部の長い面に刻まれた銘には「慶長十二年（1607年）」、「類子（ルイス）」という漢字2文字の名前、そして「三月二十四日」の日付が記されています。また、公園には五輪塔などの古い石の仏塔もいくつか展示されています。（1579年にキリスト教に改宗した島原藩主有馬晴信[1567-1612]は、日野江城に仏塔の石だけを使った階段をつくらせ、人々が階段を上がる時にこれらの石が踏まれるようにしました。これは後にキリシタンが強制された「踏み絵」を想起させます)

**日本のキリシタン墓碑について**

日本におけるキリスト教の初期につくられたキリシタン墓碑として確認されている192基のうち、146基が長崎県にあり、その全てが17世紀初期のものです。（1581年につくられた日本で最も古いキリシタン墓碑は、大阪市に近い四條畷市にあります。）長崎地域のキリシタン墓碑は、当時のヨーロッパの墓のデザインを反映し、平板型・切妻型・半円柱型・角柱型のいずれかに整形した石を平置きにしたものがほとんどです。仏教の墓石には漢字数文字からなる故人の死後の名前（戒名）が刻まれるのに対し、キリスト教の墓石には、多くの場合、西洋式の洗礼名が記されます。花十字や横棒が二本の形十字、イエス・キリストの名前の略語である「HIS」という３文字で飾られていることもあります。石の墓標は高級品だったため、墓碑で弔われているのは金銭と権力に恵まれた人々だったと考えて良いでしょう。キリスト教が禁止された後、このような平置きの墓石の中には、くり抜かれて手を洗うための手水鉢にされたり、石垣に組み込まれたり、地中に埋められたりして、仏教の建造物の一部に転用されたものもありました。長崎のキリシタン墓碑は、ほとんどが当初置かれた場所には残っていないものの、もとの設置場所の付近で発見されることがよくあります。